

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo.45（2017年4月号）◆

桜の花が咲き始めたものの、花冷えの寒さが続いておりますが、皆さまにおかれましてはいかがお過ごしでしょうか。新刊の『Intelligence』17号が今月下旬には皆さまのお手元に届くかと思えます。ルイズ・ヤング先生の論文をはじめとして、力作が揃っております。御熟読頂ければ幸いです。さて、次号『Intelligence』第18号の投稿原稿を募集しております。締め切りは、9月末です。投稿をご予定の方は、事務局まであらかじめご連絡頂ければ幸いです。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いておりますでしょうか。第11回・第12回は清水あつしさんの初期帝大新聞の研究、第13回は巽由佳子さんによるプランゲ文庫におけるデジタルアクセスの取り組み、第14回は吉本秀子さんのプロパガンダが生み出す「被害者→敵→生贄のサイクル」についてのエッセイと、研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【第110回研究会】（3月18日（土）午後2時30分～5時30分）

・阪本博志（宮崎公立大学）「神吉晴夫に関する考察：大宅壮一との対比の観点から」は、高度成長期に成立した中間文化論の文脈にて、週刊誌と新書に代表される「わかりやすさ」により大衆的支持を得た出版人として、大宅壮一と同世代である光文社の神吉晴夫に焦点を当て、彼が創刊した「カッパ・ブックス」とその特徴、また戦中の仕事との連続性を指摘する発表であった。

・宮杉浩泰（明治大学、研究・知財戦略機構研究推進員）「昭和15、16年時南方派遣情報将校の再検討—偽名旅券の紹介を中心に」は、当時、南方作戦のために多数の軍人が東南アジア方面に派遣されたが、その際、発給された偽名の旅券（外務省宛申請書類と偽造旅券の写真）を発掘した報告であった。藤原岩市、八原博通などの旅券の実物を紹介、南方に派遣された将校諜報活動について再検討を試みた。

・神田豊隆（新潟大学）「中ソ対立の発生をめぐる日本国内の論争—政府・論壇・メディア」は、1950年代から1962年にかけて、吉田茂と岸信介といった政治家、アジア・欧亜局で異なる見方を示した外務省、そして知識人（論壇）・メディアの議論から比較した。そして、どのような論者が、中ソ関係を区別し、一体視してきたか、その認識の違いを検討した。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

【コラム：周年記念とメディア史】

来年2018年（平成30年）は、明治維新から150年ということで一つの画期であることはまちがいない。もちろん、こうした区分自体には意味はないのだが、今年はロシア革命から百年目であるし、最近数年間は出版社の創業百周年記念のオンパレードでもあったように、このほかにも周年記念を探せば沢山あるはずである。

作家・堺屋太一が、『朝日新聞』に連載小説「平成三十年」を執筆したのが1997年（平成9年）のこと。平成30年は、一つには明治維新から150年であり、この年は太平洋戦争の敗戦から74年目にもあたり、また明治維新から数えて太平洋戦争開戦の年がちょうど74年目ということでもある。もう一つは、団塊の世代が70代を迎えるという、人口動態上の節目を迎える時期でもある、とこの作家は語っている。

メディア史の観点から、筆者は1月の研究会で、新聞販売史再考に関する報告を行った。新聞や出版の「百年史」は、1968年頃にこぞって刊行されているが、その後の50年間を、どのように記述し評価するかは、歴史研究に携わる者にとっても重要な課題でもあろう。テレビ、ラジオは20世紀前半から中葉に誕生したので、まだ100年にも及ばないのだが、新聞や出版は2000年より少し前の時点に、部数・売上金額ともピークを迎え、その後21世紀には減少カーブを描き続けている。しかし、2000年までの間、新聞界も出版界も他の産業と同様に、バブル景気に沸き、その後遅れてバブル崩壊を経験した。そうだとすれば、どのような要因で、この半世紀間、これら活字メディア界の高度成長は維持され、あるいは衰退したのかは歴史研究の課題でもあるし、ぜひとも新聞・出版の「百年史」を刊行してきた機関も、次の「百五十年史」を期待したいところである。20年前、近未来小説で描かれた世界からは、2017年の日本はどんな社会に映っていたのだろうか。また、これからの20年はどのようなものになるのか、興味は尽きない。

[4月10日付 文責：吉田則昭]